

職員アンケート A=できている C=どちらかといえばできていない
 B=どちらかといえばできていない D=できていない
 前年度より△上がった ▼下がった

②自己評価および外部評価項目(55項目)

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
I 理念に基づく運営							
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	B	職員が決めてしまう生活ではなく、入居者さんの思いを聞き、それに沿った暮らしを考えながらケアをする一年だった。地域福祉活動への参加もコロナ禍から回復してきた。会議で理念をふり返る機会を持っている。	・コロナ禍から回復の兆しが見えてきたが、何もかもそれ以前に戻ることは無いようです。利用者さんの生活ぶりにも変化が求められると思います。理念を活かせる取り組みに工夫や変革も必要。理念に基づくテーマをいくつか提案していけばどうでしょうか。 ・集団生活になるため、決められた生活になると思っていました。実際は、入居者の思いを聞き、食事、就寝時間等に自由があり、過ごしやすい環境であり、とても良いと感じました。		・次年度の目標達成計画でも、法人理念と実践を結びつける項目を作る予定です。計画に全てを定めるのではなく、理念をテーマに、これから何をしていくか、職員とともに考えていければと思います。 ・「ゆったりとその人らしさを受けとめる」理念のひとつが実践につながっていることを感じていただけたようで嬉しく思います。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	B	感染対策から家族以外の人との密な接触は避けつつ、地区の文化祭やカフェへの参加、町の文化祭、赤ちゃんボランティアなどが再開した。広報紙は地区の全戸に配布。	・地域においては、コロナからの5類への移行により再開しつつありますが、参加できる範囲で交流を増やす方向にしたいと思います。綾戸地区においてグループホームの現状を報告される場所があってもいいと思います。 ・以前のような自治会等の行事や事業への参加は、人的交流に配慮が必要かと思う。何かにつけて制限が解除されてきているが、予防も念頭に、地域交流室の活用や、可能な中で区民との交流が進められることを期待します。 ・自治会のおしゃべり喫茶に参加したら良いと思う(参加可能な人)。 ・町の文化祭で、グループホームの皆さんの作品、大変良かったです。		・外出や外部の人との交流は、公的な情報、医師の意見に基づき、ご家族の思いも確認しながら、再開の程度を決めていきたいと思っています。 ・綾戸のより広い範囲の方に、希望の家に親しみを持っていただけるように、自治会長様、福祉委員様とお話をしていきます。 ・おしゃべり喫茶は秋に1回しか参加できなかったもので、次年度はもっと伺えればと思っています。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	B	中学校の職場体験学習では、生徒の積極姿勢もあり、介護職のやりがいや楽しさが伝わった。ふきのとうカフェ(認知症カフェ)の会場になった。町の認知症啓発に継続して職員を派遣。		・中学生にも良い体験となったと思う。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	△ A	今年度は全て対面で開催。運営状況、ヒヤリハット・事故・苦情報告、感染対策、職員研修状況等を報告。災害時の地域との連絡体制、地域との交流、職員のサポート等、意見を基にサービス向上に取り組んだ。	・災害時の地域との連絡体制等の取り組みができた。 ・会議を通して運営状況を確認できた。特に事故・ヒヤリハット報告もしっかりとしており、対策もできていた。 ・いつも気になるのは、ヒヤリハット・事故で、今年度も大事がなくてよかった。ただ同じような事故(例えば薬の飲み忘れや転倒事故)が毎回報告されている。無くなることは無理なようですが、引き続き、改善策、確認方法を検討いただき、減少に努めてください。 ・運営推進会議の地区役員において、選出にあたり、もう少し広い範囲で、選出していただくよう依頼してはどうですか、近隣の人はばかりだと離れた地域の人は無関心になりがちです。 ・運営推進会議を通して施設への理解を深めることができている。委員の方は定期的に変わると思いますので、継続していくことが良いと思いました。		・運営推進会議が起点となり、地域の防災組織の皆様と連絡体制等を確認できたこと、感謝しております。 ・介護事故・ヒヤリハットはゼロにすることは難しいと思うものの、こうして外部の方に包み隠さずお伝えすることで、より気を引き締めて対策を考えられるものと思っています。 ・地区委員様には、今後の継続性、希望の家の思い、制度改正に伴う会議の規定の見直しをふまえながら、変更すべき時期と認識しています。自治会様にもご相談申し上げます。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	B	地域包括支援センターに運営推進会議職員を依頼。待機者状況でも連携。町より認知症カフェの運営を受託。地域に出る職員を増やすため、キャラバンメイトの職員を増やす予定。	・行政とは程よい関係を継続いただき、現下の感染状況を見極める中で、利用者への質の低下を招かないサービス提供に、適切なアドバイスを受けるなど、引き続き良好な運営に努めてください。 ・防災時における非常電源とか、デジタルを利用する管理体制とかを推進できるように行政の補助を要求してみてもどうですか、竜王の公的機関は遅れているような気がします。		・小さな町の利点を活かして行政とは程よい関係で、地域の認知症ケア向上のためにも、連携していきたいと思っています。 ・今年度は記録のデジタル化で県の補助金に採用いただきました。防災等ご指摘のことも活用できるものがないか問い合わせさせていただきます。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	A	身体拘束適正化委員会を年4回以上実施。身体拘束該当事例はないが、不適切なケアになりかねない事例を検討し、ケア検討や職員のフォロー、研修につなげている。玄関は夜間以外開錠。	・今日まで事例が無かったようですね。現状を維持するよう引き続き努力を。なお、利用者の中に日常行動に問題のある方(徘徊や暴力)も出てくるので、日頃から課題のある方の介護・介助のあり方等の研鑽に努めてください。 ・非常口の出入りに関しては、安全面を十分配慮してください。		・かつて問題行動と言われた認知症の症状も、その原因、環境、介護、薬などを多面的に見て対応するようになっていきます。それでも職員が戸惑い、悩むほどの症状を呈する方もあるので、ケアプランの調整と同時に、職員の心身のケアも行っています。 ・非常口は入居者さんのみでは開けにくい構造となっています。それでも開けようとする方がおられる時期には、追加で対応をします。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	B	今年度から「虐待の芽チェックリスト」を定期的(5月、9月、1月)に実施。この取り組みを実践につなげ、ケアの質を上げるにはまだまだ試行錯誤中である。職場の風土や、職員のストレス状況は虐待の主要な背景であり、改善を積み重ねたい。		・職員のストレス状況改善が必要。 ・グレーゾーンを確認すること。	・「不適切なケア」「グレーゾーンのケア」の定義を見ると、職員が萎縮しがちな項目があります。何のためにこうした定義があって、虐待防止は誰のためにあるのか、丁寧に職員に伝え続けたいと思います。

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
8		○権利擁護に関する説明と納得 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	B	制度を利用する入居者は現在いない。社会福祉士である管理者は、必要に応じて入居者・家族に情報提供できるよう学びを継続して準備している。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	B	契約時は時間をかけて説明し、理解納得いただけるよう努めている。今年度は食料料金の値上げがあったが、直接説明して同意を得た。利用料表や入居のしおりは見直しを加えて、分かりやすいようにしている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	B	3ヶ月ごとの介護計画説明時、年1回の個別懇談を軸に意見把握に努力し、面談結果を運営推進会議に報告している。個別レクリエーション、家族への連絡体制、LINEを活用したビデオ面会等、家族の意見から改善した。	・家族の個別懇談での希望・要望等を、運営推進会議に報告している。家族によって要望等色々であるが、意見を聞き、改善、対応している。 ・引き続き家族とのつながりを深め、利用者の希望に沿った介護サービスの提供をお願いします。		・懇談で要望を伺うと、「十分です」「感謝しているのでこれ以上は」というお答えが多くなります。懇談に限らず、日常の関わりから入居者、ご家族の思いを聞き取れるように努めます。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	C	年2回、職員面談では意見や提案を聞く場を設けている。意見のあった、写真の展示、車椅子の更新、1番館の業務動線の改善を実施。また賃金改善、バイタル測定、入居決定の過程のミニ研修を行ったが、職員の評価は下がっており、原因から考えていく。	・たとえば会議でも話したように、意見を投函できる目安箱みたいな方法をとってみてはどうですか。皆さんが投函しやすい様に、無記名とか、他の委員さんからも出ていましたが投函する意欲をあげる方法(ほうびとか)を検討してみてください。 ・職員のモチベーションを上げる工夫も必要です。可能な限り改善見直しを進めてください。改善案の良好な提起に対し、奨励報償も検討してはどうですか。 ・匿名での意見の収集方法(アンケート等)を試してみるのも1つの方法かと思えます。 ・1番館には機械入浴設備が無いようですので、増設を検討するなど、職員さんの労力負担の軽減につながればいいのですが。		・職員が意見や提案が生きると実感するにはどうすればよいか。次年度の課題のひとつと位置づけて、職員の声に耳を傾けていきます。 ・モチベーションが上がり、働きやすい職場になるために手を打っていく必要があります。法人全体で考えていけるように課題提起します。 ・1番館の浴室は壁面の強度の関係でリフトを後付けするのが困難です。開設から17年が経ち、職員の負担軽減も考慮して、今後の修繕整備を検討します。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	B	個別面談では、働き方の希望や心配事の把握、目標到達度等を聞き取っている。所長・主任・ケアマネジャーの役割分担、両ユニットで勤務できる職員の増員、勤務帯と業務の見直しを行い、職員の状況やストレスを把握できたり、声を出しやすい職場となるよう努めた。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	A	外部研修がほぼコロナ禍前の状況に戻り、一人ひとりに適した研修参加を行っている。困難ケースにフォーカスした研修、他のグループホームを体験する研修、法人内での事例発表会を開催。新規採用職員は育成プログラムに沿って、面談、レクチャー、達成度評価をしている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	A	竜王町主催の介護職員キャリアアップ研修、近隣7グループホーム合同の勉強会、東近江圏域のグループホーム部会は特に積極的に参加し、同業者と顔の見える関係を築き、各現場の生の声に刺激を受けている。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援							
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	A	入居から1ヶ月程度は特にコミュニケーションを密にし、職員間で情報共有をし、関係作りをしている。地元出身・在住の職員が多く、昔話や地元の話に安心感を抱かれる新規入居者は多い。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	B	申込み段階から、本人とご家族の思いが理解できるよう努めている。入居時の心配ごとは個人差が大きいことから、柔軟に対応するようにしている。入退居のペースが速まり、介護職員は信頼関係構築に戸惑っているかもしれない。		・家族とのふだんのやりとりはどのようにしているのか。	・入居時に一通り情報をお聞きするものの、それで十分ではなく、その都度お聞きしたり、来ていただいで確認することもあります。 ・情報が伝わるように連絡担当を決めていますが、現場スタッフがとりとめの話でご家族との関係を深められるようにしたいと思っています。

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	▼ B	丁寧なアセスメントし、こまめに支援内容を調整している。自宅でのケアマネジャーやサービス事業所にも助言を求めている。評価が下がった点は、初期支援ありかたをより良くしたいという介護職の姿勢であり、実践につなげたい。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	▼ B	わが家のようにしゃべってもらい、入居者とともに喜び、悩みたいと職員は思っている。入居者と支援者の関係性は、理想に達するのが難しい課題だが、次年度はチームとして取組みたい。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	B	ご家族はケアに不可欠な存在。外出、受診介助、物品補充等、家族が関わってもらえるようお願いしている。8月と12月に感染症の山があったが、面会中止にはならないよう、注意を払いながら面会を継続した。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	▼ C	外出・外泊できる入居者が比較的多い現在であるが、職員の評価は下がった。感染症で家族以外との接触はまだ難しく、馴染みの人・場所との関係は再開できていない。ポストコロナでどのようなケアを展開するか、次年度の課題。	・少しずつ外出、散歩を実施していこうとされているようですね。冬季は寒暖差が大きく体調面でも配慮が必要です。利用者さんと外部者との交流は、感染症の発生時期、感染状況や天候なども含めて検討ください。 ・コロナ前の状態に近づいてもらえれば。		・12月からインフルエンザ警報継続中のため、外出や面会時間の制限が続いています。感染症との付き合い方は、最新情報をふまえて見直しを続けます。 ・親族、知人、地域…コロナ禍でつながりが薄くなった人とどう関わりを結び直していくか。引き続き努力します。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	B	リビングでは入居者間の関係に配慮し、居心地の良い環境づくりに努めている。認知症からくる混乱や不安から、入居者同士が対立する場面もあるが、介護計画によって個々を支援して、解決をめざしている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	B	死亡以外の契約終了ケースはなかった。死亡後の支援を必要とするケースもなかった。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント							
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	▼ B	認知症のある入居者の意向をどのように把握していくのか、限られた時間の中でどう関わっていくのか、介護職はジレンマの中にある。ひとりで悩むのではなく、入居者がその人らしく暮らすために私たちはどうしたいのか、考えていきたい。	・今も皆で話し合われていると思うが、今後も職員全体のチームワークで考えて、意向把握に努めてください。		・入居者さんの思いを職員それぞれが聞いています。嬉しいことも悲しいことも、幅広く思いが聞き取れるように、チームワークで取り組みます。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	B	入居前後の面接でこれまでの暮らし、認知症発症からの経過等を詳しく聞き取り、記録している。これらを活かして本人との関係を築いたり、サービスの工夫につなげている。		・入居される方の生活環境が、家庭での暮らしに少しでも近づけるためには大事なことと思う。	・環境の変化は、認知症の方には大きな負担になります。その落差が少しでも小さくなるようにしています。
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	B	本人の能力をあきらめず、力を発揮していただきたいと考え、家事や軽作業を入居者とともにやっている。職員会議では様々な職員の視点を出し合い、それぞれの心身の状態、できること、思いがけない発見等を共有するようにしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	B	介護計画策定のプロセスを見直し、見直し前月にカンファレンスを新設。観察やケアの試行をした上で、職員会議で決定することとした。介護計画は少なくとも3ヶ月に一度は見直し、家族に面談して説明、同意を得ている。	・特定の職員に任せっきりにならないように、引き続き、可能な限り複数の者がチェックし、利用者の意に沿う介護計画の策定に努めてください。 ・現状に即した介護計画は継続してほしい。		・アセスメントをしっかりとすることは、職員のレベルを上げることもつながるので、多くの職員が参加し、考えられるようにしていきます。 ・介護計画の検討は多くの職員が出席し、計画の実施状況もこまめに評価できるのが小規模事業所の良いところです。

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答	
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	▼ C	記録に関する外部研修の受講、マニュアルの確認を行ったが、評価は低くなった。記録のデジタル化開始も近づいており、記録のあり方やポイント、時間のかけ方を見直していきたい。			・記録のデジタル化に伴い、個人情報の取り扱いには注意が必要(データをUSBで管理して、紛失等)。 ・個別の記録は筆記は大変だと思いますので今やスマホで何もかもできる時代です。デジタルの促進で、いつでもどこでも関係者は、情報が取れる体制を考えてみてください。 ・1番館の職員さんの引継ぎメモを見て、大変そうだった。	・4月から記録がデジタル化されます。働きやすい職場、求職者に選ばれる職場、サービスの質向上のための導入です。 ・記録の評価が低かった理由は語彙力ではなく、記録すべきことを見極める視点、継続して観察すべき事柄の申し送り、入居者の思いや言葉をすくい取る力などが不足しているのだと分析しました。レベルが底上げできるように取り組みます。
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	B	歯科関係やリハビリ専門職とは連携可能な体制があり、ニーズに臨機応変に対応している。家族の状況に応じて、保険証類の預かりを実施。ニーズに応じて、短期利用を初めて実施できないか検討している。				
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	B	入居者個々の地元自治会から、直接または家族づてに見舞いが届くことがある。本人の家族が利用している小規模多機能と連携して、面会や帰宅ができるようにした。民生委員の傾聴ボランティアが開始。学童や幼稚園との交流再開は次年度の課題。				
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	A	入居時に主治医の継続か、協力医療機関への転医か選択してもらっている。現在は全員が協力医療機関による健康管理(月1回の訪問診療と月3回の訪問看護)を選択。専門医等の受診は家族の協力を得ながら進めている。	・入居者の健康管理に適切な計画がなされている。 ・引き続き、現在の良好な選択で、本人、家族の意向に沿って継続ください。		・医療連携には毎年、委員様からも職員からも高い評価を得られて嬉しく思っています。今後も弓削メディカルクリニック様と連携していきます。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	A	月に3回の訪問看護により、担当の訪問看護師と連携を密に支援している。入居者の状態もよく把握してもらっている。介護職の小さな気づきも、遠慮せずに質問や相談ができる関係にある。				
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	B	病院ごとの対応の違いに戸惑うことがあるが、入院の度にこまめに足を運んで関係を作るようにしている。本人や家族と病院をつなぐ役割を心がけ、スムーズなグループホーム復帰を目指している。		・入院時はいろいろありがとうございます。帰っても寝たきりになるかと心配しましたが、すぐにリハビリをしてもらって、ありがたかったです。	・リハビリという大層なことはできませんが、生活の中でトイレや椅子に移るのに立ち座りする。周り気分よくお話ししたりすることが、回復につながったのかもしれない。	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	▼ B	入居時に、重度化・終末期ケアに関する指針について説明、同意を得ている。希望があれば、家族や医療機関と密な連携のもと、お看とりのケアをしている。令和5年中は8人の死亡終了者中、5人がグループホームでのお看とり。数が多かった分、職員の負担も大きかった。	・看取りの職員負担が大きいことから、介護度の高い方の特養へのサービス変更が選択肢にあるのか気になりました。 ・終末期に近い方は早めに自宅の方へ願います。 ・大変な仕事だと思うが、家族との連携を密に今後も取り組んでほしい。 ・引き続き、施設、職員の協力のもと、本人、家族の意向に沿ってもらえれば非常に有意義だと思う。		・グループホーム入居後に特養入居決定を受けられる方もありますが、慣れ親しんだ環境・職員との関係性もあるので、過去は全員、グループホームで過ごすことを望まれています。 ・特養、老健、小規模多機能、デイ等様々な経験を持つ職員がおりますので、重度の身体介護は十分なものを提供できていると思っています。お看とりのケアを通して、介護職のやりがいや深みを再確認でき、人材育成になります。 ・看とりの場として、自宅、グループホーム、病院といった選択肢はお示しますが、8割以上の方がグループホームを選択されます。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	B	1日のうち10時間30分が1人勤務であり、職員が不安を感じない体制を作っている。急変や事故時に職員が苦勞しないよう、24時間、緊急時対応ができるようにしている。採用時に説明するとともに、職員会議で確認している。		・私どもはいつ何が起ころうと、日頃十分良くしてもらっているため、安心してください。感謝しかありませんと職員の皆さんにお伝えください。	・私たちは「もしも」のことを予めお話しするので、ご家族様にはご心配をおかけしていることと思います。ご家族様の思いを受けとめて、ケアにあたります。	

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	B	今年度は運営推進会議を機に、地元自治会・防災組織との意見交換と連絡体制の確認、訓練の実施ができた。消防訓練は年2回(1回は防災訓練を兼ねる)。業務継続計画(災害・感染症)を策定中。非常災害対策計画に基づき、備蓄品のチェックを実施。	・地元自治会長、消防団との連携が一番大事だと思うので、年1回は話し合い、点検等をお願いします。 ・地元自治会や近隣住民との関係を密にし、災害時に備えておくことは非常に大事なことです。対応策等については、自治会と毎年確認を実施してください。自治会役員や組織体制の変更などに対処ください。 ・先日綾戸地区で停電があり、個人でも冬の時期に電力の供給が停止になると非常に困ります。自家発電装置は無いとのことでしたので、防災の面からも、発電装置の手配・電気を使用しない暖房器具の手配(昔ながらのやかんのかけられる石油ストーブ等の準備)検討してみてください。風呂の水の貯水(トイレの水を流すのに使用できる)その他、防災備品の準備はできていますか？(水の準備等も含めて) ・最近自然災害が多いので、備蓄品は十分に。		・地元自治会長様、消防団様と、年1回は何らかの情報交換の場を継続させていただければと思います。 ・自家発電装置は補助金の有無の確認、必要な大きさ、停電時に在勤の職員で起動できるか等を検討した上で、導入を考えていきます。 ・飲料水、非常食の数が十分か、災害時のトイレはどうするか、現在、事業継続計画を見直しながら、再確認中です。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援							
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	C	認知症の入居者は嫌なことや傷ついたことを訴えることができない。親しみのある関係が行きすぎて、入居者を試したり、恥ずかしい思いをさせていないか。評価が下がったことを振り返る機会として、取り組んでいく。	・普段生活をしているときに私は、そこまで考えて話していないのが現状です。職員さんの皆さんは大変だと思います。頑張っていたらいいと思います。個人の意思を尊重して話すことは、大変むづかしいことだと思います。 ・認知症状を誰よりも理解されている施設職員が利用者の良き理解者です。日々の介護に当たっては、その人の個性、プライドを傷つけないように配慮できればいいのですが、大変な困難なことなので、可能な限り配慮いたしたい。 ・認知症の方への対応は難しいと思いますので、自分なりの判断で良いのでは。 ・難しいことだと思います。正解がハッキリと分かるものではないので、常に意識することが必要になるかと思いました。		・評価が下がった背景には、①自分自身のケアがまだまだ不十分。②一緒に働いていて、他の職員のケアが不適切に感じる、の二面性があると思っています。 ・地道でも、ケアの基本を見直す場を作り続ける。職員同士が語り合っ、ケアの考え方や悩みを分かり合う取り組みを続けます。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	B	小さな集団で長い時をともに過ごす。だからこそ表情や動きで感じ取れることがある。小さなサインに気づき、意思表示がしにくくなっている方の思いにも応えていきたい。言葉を大切に聞き取ることは当たり前のようで難しい。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	C	入居者の生活の流れに職員が合わせていく方が入居者の混乱もなく、穏やかな暮らしとなる。職員の流れに合わせようとしてもらっていると問題意識を持つ職員が増えており、チャンスにしたい。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	B	髪形や髭剃りといった日常の身だしなみにも気配りを大切に、衣服はおしゃれを楽しむよう努力している。化粧品は家族の協力を得て本人の思いに沿うようにしている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	B	湯せん調理を導入。入居者からも好評で、自施設調理と組み合わせることで食事を準備している。食器拭きは毎食入居者が、可能な日は準備にも参加。お彼岸や十五夜、節分等、季節に合わせた食事とともに作っている。	・食は人を幸せに感じさせてくれます。家庭づくり、特に食事づくりを日常生活に取り入れ、可能な範囲で利用者自らが調理されることで、個人の役割を見出していただけると有意義なものと思います。なお時代の変化に伴い、レトルト食品の活用利点を活かした施設運営も職員の労力軽減につながるとは思いますが、あまり頼りすぎないようご注意ください。 ・入居者ができることはどんどんしてもらいたいと思う。湯せん調理も導入され、時短にもなりいいと思う。 ・四季、風習、風土の時期の食事は良いと思う。 ・いつも温かい、おいしい食事を出してもらい、本人も喜んでいてと思う。自分の手で食べられることは一番幸せなこと。少しでも職員さんの手間がかからない工夫をしてください。		・たくさんの野菜をいただいた時には、3~4人の入居者が一斉に野菜を切っておられる時があります。最近は手作りおやつが時々あります。タイミングを見ながら、入居者さんが参加できるようにしていきます。 ・生産年齢人口減少の影響が、介護業界により深く影響を及ぼしつつあると感じます。「人の手でできないこと」「機械等で生産性向上を図れること」を区別しながら、温かいグループホームを維持します。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	B	体重や嚥下機能、希望等をふまえ、食事形態や量を考えている。水分が少ない方は、種類やタイミングを工夫。協力医療機関の言語聴覚士や栄養士に相談もできる。食事量や水分量を毎回記録。体重測定は月1回。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	B	口腔衛生管理体制加算算定。毎月、歯科衛生士の指導があり、その方に応じた口腔ケアを実施。必要に応じ、協力医療機関の歯科の往診が可能。義歯は定期的に洗浄剤で消毒洗浄。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	B	15名がリハビリパンツやオムツ使用。時間を決めず、一人一人に応じてトイレに行く等、個別の排泄介護に努めている。新しい排泄用具を取り入れ、排泄介護の回数を少なくするのが基本姿勢。ポータブルトイレの使用も極力少なくしている。	・トイレ介助は職員さんの一番大変な仕事だと思う。少しでも腰に負担がかからないようにしてください。 ・トイレでの排泄自立を継続させることは、たいへん難しい面があるかと思う。個々の時間に合せると人も手間もかかるとは思いますが、利用者のプライドや思いに沿っての活動に感謝します。		・職員へのお心遣いありがとうございます。以前と比べれば排泄用品の進歩により、介護の回数が減っています。職員の腰痛予防に気をつけます。 ・排泄で恥ずかしい。嫌な思いが少なくなるようにしたいと思います。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	B	下剤を第一選択としないように、牛乳や乳製品を活用している。野菜の多い食事、個別の介護計画で水分摂取を工夫するなど努力。重度化しても本人に負担のない範囲で、トイレで排泄できるよう取り組んでいる。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	B	入浴の回数や時間は均等な対応ではなく、頻繁に入りたい人・入りたくない人、必要性・自立度などに応じて対応している。職員体制から入浴可能日・時間帯は週2～3回の入浴を基本に、その日の気分や急な体の汚れがあれば柔軟に対応している。	・引き続き「入浴」ができる喜びを噛みしめていただけるよう、職員の人的対応の課題もあるが、可能な限り、利用者の要望に添えるように努力したい。なお機械浴の方の入浴回数に配慮を願いたい。		・シフトの都合で1日の入浴人数を減らすことになった代わりに、お風呂のお休み日を月0～2日まで減らして入浴回数を減らさないようにしました。 ・機械浴の方が、他の人と比べて回数が少ないということはありません。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	B	その方の寝たい、起きたい時間に合わせて対応。眠れないことが続けば、行動や心理状態の変化も踏まえて対応を考えている。日中は本人の体調や希望に合わせて、居室での昼寝など声かけしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	B	最新の薬情報は職員がすぐに確認できる場所に設置。薬剤師とは気軽に相談できる関係にある。薬関係の事故やヒヤリハットを減らすために、マニュアルの見直しや間違いを防ぐための薬袋の表記の変更等の工夫を続けている。		・薬に関する間違いやヒヤリハットが見受けられるので、常に対策を。	・入居者さんの状態の変わり目で、飲みこぼしや後から吐き出されることがあるので、ご様子を気をつけて見ていきます。
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	B	無理せず、できる範囲で家事や軽作業への参加を支援。役割があることが生きがいになるように思っている。嗜好品(酒・煙草)の希望者は、家族と話し合いながら実現している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している		外出や散歩の希望が少ないのは、入居者が落ち着いて暮らしているからか、出られないと諦めているからか。4年ぶりとなったお花見や外食等のお出かけはとても喜んでくださり、いつもと違う活気と言葉を見ることができた。ドライブも再開。	・職員さんと一緒に散歩は、会話が見られ、楽しそうな感じがします。 ・外出は気分転換や季節感を感じて良いと思う。 ・引き続き、本人、家族の理解の中で継続ください。屋外散歩は、季節に応じて視覚、聴覚、臭覚などを体感できる良い機会だと思う。季節外れのインフルエンザやコロナの感染も注意が必要ですが、家に籠もるのは病気を呼び込みます。少しでも外気に接する機会をご検討ください。 ・仕事が多い中で外出となると大変だと思う。都合がつかない時は(家族に)声をかけてもらったら協力したいと思う。 ・家族との散歩が楽しそうですね。家族の希望があれば支援してあげてください。		・コロナ禍前の外出の取り組みを知っている職員が半数以下という現状があります。気兼ねなく散歩に行く、思い立った日に外出する、そんなグループホームらしさを次の職員に伝えていけるよう努めます。 ・ご家族との散歩、外出のサポートもしていきます。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している		金銭所持することで安心感が得られる等の理由がある方は、ご家族と相談の上、所持している。感染症対策もあり、お金を使用する場に出かけることはできていない。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	△ B	人数は少ないが、希望者は家族に電話したり、ビデオ通話している。携帯電話を所持している人もいる。手紙が届くことや、電話がかかってくることはあるが、こちらからすることがないので評価が低い。キーパーソン以外の近親者に広報と写真を送っている。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答	
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	B	清潔さと快適な匂いで、従来の介護施設の印象から脱却したいと努力している。日差し、外気に気を配りながら、室温や明るさのこまめな調整を心がけている。四季の花、飾り物で季節を感じていただきたいと思っている。		・昔は病院・診療所・老人ホーム等は特有のにおいを感じましたが、今はほとんど感じません。どちらかといえば、各個人の家のほうが独特の雰囲気を感じることがあります。綾戸のグループホームは何も感じませんでした。どちらかといえば、一般のお宅より、清潔だと思いました。 ・施設内には、入居者の作品等も飾られており、工夫されていて、とても良いと感じました。 ・いつ伺っても穏やかで、温かくてほっこりします。皆さんそれぞれにゆったりしてて、職員さんも大変でしょうがいっぱいしゃべっていただきます(昔話ですが)。 ・夜間、廊下の奥が暗い怖いと感じている方が居られるかと思えます。奥行きが遠くに見えない工夫が必要ですね。		・お褒めのお言葉ありがとうございます。家庭的でありながらも清潔で、動きやすさも大切に考えていると思っています。 ・インフルエンザ警報中の今は、面会が居室となっていますが、かつてのようにリビングでのんびりと、他の入居者さんも交えてご面会ができる日を楽しみにしています。 ・入居者さんが怖がったり、困ったり、分かりにくいと思われる箇所は、改善に努めます。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	C	1番館は現在、リビングの見直しに取り組んでおり、一人ひとりの居場所作りへの思いが高かったため、評価が下がった。共同生活を強いるのではなく、心地良く暮らせるような環境の支援を、既成概念にとらわれず見直していきたい。				・今年2月に1番館の家具を買い換え、リビングを一新しました。現場職員の提案の通りに実現できたと思います。
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	B	個人差はあるが、自宅で慣れ親しんだ家具や飾り物等を持参されている。入居後の生活に合わせて工夫しながら、写真を飾ったり、できるだけ居心地の良い空間となるよう努めている。		・引き続き、本人、家族の意向に添える部屋作りができるといいですね。		・居室づくりは入居時にある程度行くと、その後は変化があまりない部屋も多い。担当職員は満足できているのか、聞いてみるのもよいと思っています。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	B	ややこしい表示の目隠し、トイレの明示、スイッチ類の解説の表示など、必要に応じて改善。入居者の視点の高さや認知機能に配慮して工夫を続けたい。				

ここまでご記入いただき、ありがとうございました。

振り返っていただき、希望の家の「優れている点」「工夫している点」「評価できる点」等をご記入ください。この項目は自己評価の表紙の項目に反映します。

・今年度は地元自治会長、地元消防団との連携が取れて良かったと思う(一番大事)。
・地域と密着して、地域(自治会)活動においても、可能な限り参加していただき、これからも安心と信頼に向けた関係作りのグループホームを築いていただきたい。
・「希望の家・綾戸」は創設者(上田理事長)の思いが詰まった施設であり、その意向を事業所理念に掲げ、近隣住民との関係を深めるなか、綾戸自治会活動にも大いに参加され、地域とは良好な関係を築いている。
・竜王町の文化祭に参加されたこと、良かったです。
・自己評価の実践状況の内容が「わかすぎの丘・七里」と同様の項目が何点ありましたが、評価は異なっています。職員がケアへの自信とプライドを取り戻せるよう運営の工夫をよろしく願います。
・工夫点について。①防災備品の再点検(発電機の導入)。②デジタル化の推進。③会議の進め方(事前資料の配付による討議時間の短縮)。④行政の補助金の獲得推進。
・外側の通路は滑り止めを貼り付けた方が良いのでは。各室の前の通路が少し暗く感じた。小さい子どもより世話がかかるので、気分転換してがんばってください。
・利用者や家族の思いに添える介護サービスの提供、居住環境作りに役職員一同が工夫を出し合い、介護事故防止を図る中で、楽しい時間の提供に尽力されている。
・職員へのミニ研修やキャリアアップ研修等、多くの研修を受けていることはレベルアップにつながり良いことだと思う。
・介護事故・ヒヤリハットに関しては、常に原因追及され、対策を取っていることに感心させられた。
・入所してもうすぐ3年。その間、1回入院したものの帰ってこられて、寝たきりにならなくて、元気に99歳の誕生日を祝わせてもらえて、とてもありがたく思っています。他の入所者さんと顔なじみになって、伺ってもいろいろ話ができ、本人はだんだん会話が少なくなっても、他の方と通じ合えるので嬉しいです。職員の皆様も大変でしょうが、これからもよろしく願いいたします。
・人生最後の「終の棲家」、最期の看取りを利用者や家族の希望に添えるよう、事業所・職員が一丸となってサービスの提供に務められている。